

平経盛と『忠盛集』

千草 聡

《一》

平経盛の家集『経盛集』は、その奥書「神主重保依願請当世好士各和歌百首可進納神殿云々」¹から、重保の「寿永百首」編纂に応じた自撰家集とみられる。所収歌数は四季・恋・雑合せて一二九首（他者詠二二首）。集中には賀茂社関係の歌を含む他歌人主催歌合での詠歌や、自家主催歌合での歌、二条院歌会での詠歌、俊成や実定らとの贈答歌など、既存の詠藻より「惣注出」（同奥書）した諸詠歌が収められており、経盛の幅広い和歌活動の一端をそこに窺うことができる。

『経盛集』には、忠盛家歌会での隔関恋の題詠歌（八四番）や、忠度家の「花さかりなるをみてよめる」歌（十八番）など、平家歌人間の交流を示唆する歌もある。特に一〇九番歌の詞書に「左京大夫俊成打聞させむとて故刑部卿のよまれたる歌どもを尋ね侍りしかば」と記すように、経盛は忠盛の遺詠を所持していたらしく、平家歌人がこれら忠盛歌を詠作時に参照していた可能性は考えられる。

稿者は先に、平家歌人の間に窺える詠作上の影響関係を見るべく、経盛ら平家歌人における忠盛歌の受容を調査報告した。²忠盛歌初出の和歌表現の撰取という観点から『経盛集』『忠度集』『経正集』の各所収歌を粗々吟味したもので、結果として経盛四首、忠度・経正各一首の都合六首に忠盛歌との関連性を指摘した（第三節に再述）。

ただ、このほかにも『経盛集』には、忠盛歌に同じく前例希な歌枕を踏まえた歌、あるいは同一場所の月を歌材に用いた歌、が散見する。以下ではそれら経盛歌を取り上げ、忠盛歌との関連で粗々吟味してみたい。また忠度の同様の詠歌についても、合わせて吟味する。

なお便宜的に「忠盛集」所収歌を先覚の分類に従って歌群に整理する。現存「忠盛集」は、一九〇首を収める異本系「忠盛集」（谷山茂氏蔵本）、三九首を収める流布本系「忠盛集」（神宮文庫本他）の二系統が存するが、このうち異本系の一〇九番までを異本系A歌群、一〇〇〜一四四を同B歌群、一四五〜一七二を同C歌群、一七三〜一九〇を同D歌群と呼称し、流布本系の一〇二九を流布本系A歌群、三〇〇〜三九を同B歌群と呼ぶ。これは後に経盛と「忠盛集」との関係を考察する際に関わってくる。

〈二〉

『経盛集』と『忠盛集』両系統本の各々の詞書を比べてみると、出詠歌合や歌会での同座を示唆する記述は希で、前述の『経盛集』八四番の忠盛家歌会のそれが唯一と言える。歌題でも、花や雪など素題は一致するが、結題での一致は殆ど見られない。だが、歌枕（地名）は両家集で共通するものが多い。住吉や難波、逢坂など一般的に用いられるものを始めとして、「みづわけやま」（忠盛集A一番・経盛集四番、以下同）、「きよみがた」（忠盛A三七・経盛五五）、「あはぢしま」（忠盛A十五及びD一七六・経盛七三）など、平家歌人以前の用例の少ない歌枕（地名）も指摘できる。ここで取り上げたいのが、こうした前例の少ない歌枕を、忠盛に同じく経盛も詠み込む場合である。以下経盛のそれら歌枕を撰取した歌三首を取り上げ、忠盛歌との関連で吟味してみる。

しげいへの卿家歌合に

五五、わが心あくがれにけりきよみがたなみぢはるかにてる月を見て（経盛集）

〈傍線・波線は稿者による、以下同〉

『経盛集』五五番の永万二年重家歌合での月題歌を掲げた。同歌合証本によると、経盛は師光相手に花・郭公・

月・雪・恋の五番歌を合わせ、結果は勝一・持三・負一。右はそのうちで判者顕広が勝と判じた一首に当たる。歌を見ると、波線を付した初句と第五句は『古今集』八七八番の、

○わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て（古今集・八七八・よみ人しらず）

の当該句と一致し、経盛がこれを参考歌の一首としたことが分かる。古今集の歌は、更級の姥捨山に照る月に取材した歌だが、経盛はそれを「きよみがた」の波路遙かに照る月に置き換え、「わが心あくがれにけり」と感懐を叙している。

「きよみがた」は清見が関とともに駿河の歌枕であり、平安末期より多くの用例が見られる。その関や紅葉、雪に取材した歌が現存諸歌集中に散見するが、月に取材した歌は経盛以前は少ない。次の『為仲集』一三五番歌、

十月十日、きよみがせきにとまりたるに、月いとあかし

○岸ちかくなみよる松のこのまよりきよみがせきは月ぞもりくる（為仲集）

三七、みそらはれなみぢにひかりみちにけりあきのなかばの月きよみがた（忠盛集）

との忠盛歌を指摘できる。これは異本系「忠盛集」A歌群の「忠盛百首」秋部所収歌であり、忠盛は秋半ばの月が清見潟の海面を清らかに照らす情景を踏まえ、「なみぢにひかりみちにけり」と詠じている。このほかにも『今撰集』七五番の顕昭歌、「続拾遺集」三一一番の登蓮歌、「山家集」三一九番の「海辺月」題歌、同三二四番の「名所月」題歌（宮河歌合歌）など、経盛と同時代歌人詠にも清見潟の月を歌材に用いた歌は見られるが、波路の月となると、経盛以前は右の忠盛歌が唯一となる。

忠盛が何に依ってこの波路の月を着想し詠出したかは分からない。清見が関の月を詠んだ為仲歌を参照した可能性はあるかもしれないが、為仲歌より「なみぢ」の月を着想したものか、他の先人の歌を踏まえたものか、忠盛の独創によるものか、は現存資料から判断しがたい。ただ、経盛に關しては自歌に清見潟の波路の月を詠み込んである点からすると、先の『古今集』歌に加え、この忠盛歌も詠作時に参照していたと見て良いだろう。

俊成は当面の経盛歌判詞で「なみぢはるかにてる月を見てといへる、すがたいときよげに見ゆ」（重家歌合証本）と評価しており、彼自身その表現を後の治承二年右大臣兼実家百首の旅歌で「清見がた波路さやけき月を見てやがて心や関をもるべき」（長秋詠藻・五四九）と用いている。清見潟の波路の月を詠じた忠盛歌が経盛歌の右の表現を招来し、それが俊成へと伝わったことになる。この忠盛の斬新な発想に基づく歌枕撰取歌が経盛ら後の歌人に参照されていたことの一端がここに窺える。

福原の北野の山荘にて、人人祝の歌よみ侍りしに

一二六、さかえゆくひらのの松ぞたのもしき千とせのかけにすむ身と思へば（経盛集）

次に福原の山荘における経盛の祝歌を掲げた。詞書の「人人」より歌会詠と思われるが、具体的な参加者などは分からない。経盛は倒置を用い、上句で栄えゆく平野の松を言祝ぎ、下句で、その千歳の松のような君のご恩に浴す我が身としますので、と歌う。第四句「ちとせのかけ」は様々な解釈が可能であり、取り敢えずここでは松と帝の両意を掛けると解したが、院など他の存在も措置できよう。

もとよりこの歌句は、現存諸歌集中では次の素性法師歌を初見とする。

よしみねのつねなりがよそぢの賀にむすめにかはりてよみ侍りける

○よろづ世を松にぞ君をいはひつるちとせのかけにすまむと思へば（古今集・三五六）

第五句が「すむ身と」（経盛）「すまむと」（素性）と若干異なるが、経盛歌と素性歌の各々の下句は内容的にほぼ一致しており、経盛は右歌を詠作時に踏まえたとみられる。素性は「よしみねのつねなり」を指して「ちとせのかけ」と詠ずるが、経盛歌詞書に具体的人物名はなく、先に触れた如くその指示対象の特定は難しい。

経盛はまた、上句で山城の歌枕「平野」を歌材に用いている。ここは平野祭に初めて男使を立てた際の能宣歌（拾遺集・二六四）以来、その松を詠む事が多いが、経盛歌の場合、「平野」の「平（ひら）」に平家の意を掛け、その松共々「さかえゆく」自家は頼もしい、と詠んでいる。こうした「ひらのの松」に平家の繁栄を祝う意を込めて詠む歌は経盛歌に留まらないが、現存諸歌集中では平家と交渉のあった歌人、あるいは平家関係の人物の詠

歌に散見する。例えば「平家の人のつかさなれるよるこびに」との詞書のもと「おひのぼるひらのの松は吹くかぜの音にきくだに涼しかりけり」と詠む『清輔集』三二〇番歌のほか、永万二年五月経盛歌合での清輔の祝歌（『夫木抄』八二七九番所載）、『新千載集』九三九番所載の建春門院滋子が平野社に参詣した折の歌、がその例にあげられる。逆に『重之集』二〇八番歌、あるいは平家の滅亡後に詠まれた歌、例えば『千五百番歌合』二二二五番の宜秋門院丹後の歌、『統古今集』七二三番の家隆歌、『後鳥羽院御集』一六五三番歌はその限りではない。また『山家集』一一八一番（『西行上人集』五二五番）歌も「ひらのの松」を歌材に用いた歌だが、詞書に「いはひ」との記述しかなく、これが平家に関わる詠歌かは現存資料より判断しがたい。

以上、経盛以前並びに同時代歌人における「ひらのの松」を詠む例を掲げたが、「平野」に平家を掛ける着想は経盛歌を嚆矢とするものではなく、異本系『忠盛集』A歌群の「忠盛百首」中の神祇歌が初見と言えそうである。

八二、よろづ代とまつるひらの、のまつがえのしげるやかみのめぐみなるらん（忠盛集）

忠盛歌の第三句以下を文字通り解せば、（平野社の）松の枝が茂るのは（平野の）神の恵みであろう、となるが、当時の忠盛を取り巻く状況が平野社の「まつがえのしげる」ようであった点は注意される。久安頃の忠盛は、清盛や経盛忠度らの嫡子に恵まれ、その子供達が官位に就き、一門が僅かながらも発展の途上にあつたわけで、そうした状況を考慮すれば、忠盛が当面歌の「ひらの」に平家の意を掛け、「しげる」松が枝に一門の発展を重ねて詠じた、との解釈もできよう。他の『久安百首』歌人が詠み込んでいない「ひらの、まつ」を、忠盛が能宣歌や重之歌以来わざわざ自歌に詠み込んだのも、単なる神祇歌の歌材としてではなく、そうした一門の発展を祝い、それを平野社の神へ感謝する目的による、とみるわけである。この忠盛歌以降、「ひらの」に平家の意を掛けた慶賀の歌が諸歌人に詠まれるようになり、経盛が福原の山荘で詠じた当面の祝歌もその一首に数えられる。経盛は先の『古今集』の素性歌に加え、用例希な歌枕を撰取した右の忠盛歌も詠作時に参照したことが推測される。

高陽院中将、もとすむ所にはなかりければ、又もえいはずなりにけるを、

それよりよみてつかはしたりし

九二、ほどもなくおもひかへるにしろきかなさもあらぬみちのふみたがへとは（経盛集）

かへし

九三、あふみちのしるべなればいかでかはふみかよふべきせたのながはし（経盛集）

次は『経盛集』恋部の歌である。詞書には、高陽院中将が「もとすむ所」になかったので又も手紙を送れずにしたところ中将の方から経盛に歌を贈ってきた、とある。中将歌は『今撰集』恋部一二六番にも採られ、その詞書は「はじめて文つかはして又おともせざりけるひととへつかはしける」と記す。顕昭撰の同歌集は永万元年（二二〇年）同二二〇年の成立とみられるから、これ以前に経盛と中将は右の贈答歌を交わしたものであろう。ちなみに中将の仕えた高陽院勲子は久壽二二〇年十二月十六日に六一歳で没したことが明らかだが（女院小伝⁶）、中将の略歴は現存諸資料からは辿りがたい。

中将歌を粗々解釈すれば、程もなく思い返すに明らかです、関係のない道の踏み間違えとは（関係ない方からの間違いの文とは）。下旬の「ふみ」に「踏み」と「文」を掛けており、対する経盛もこの掛詞を踏まえつつ、さらに「あふみち（近江路）」に「逢ふ」「道」を掛け、近江路の道案内もないので一体どうして踏み通うことができましようか勢多の長橋を（貴女に逢うための道案内が無いので、文を通わせられませんでした）、と返歌している。中将は文を寄越さぬ経盛を恨みつぽく詠み、一方の経盛は中将が「もとすみたる」ところに居ない事を理由に弁解めく歌を返したわけである。

経盛は中将歌中の「みち」と「ふみ」の語だけを取り上げ、他は贈歌にない近江路や勢多の長橋の語を答歌に詠み込んでいるが、この点は注目される。一般に恋歌では近江や逢坂は歌材として詠み込まれる事が多いから、経盛はそれら歌枕を利用して返歌したものかもしれないが、「せたのながはし」を恋歌で用いた例は、平安期には当面の経盛歌も含めて僅かしか見られない。

もとより近江の勢多の橋は、現存諸歌集中では西本願寺本『忠盛集』一二六番と『兼盛集』十四番で「せたの

はし」と詠まれたのが古く、ついで高遠が「せたのからはし」と詠じた例が見える（高遠集・二三六）。「せたの
ながはし」の用例は『堀河百首』前後より多く目にされるが、それらは「駒迎」や「橋」の題詠歌が殆どであり、
次の周防内侍に詠み贈った匡房歌が恋の贈答歌で同橋を歌材に用いた初見となる。

すはうのないしのもとへつかはす

○あふさかをえこそわすれねとしふれどせたのながはしいたくつるまで（江帥集・四五〇）

匡房歌の詠作時期は分からず、また周防内侍からの返歌は『江帥集』に見られない。匡房は『堀河百首』橋題で
も「まさの板も苔むすばかり成りにけりいく世かへぬるせたのなが橋」（一四二六番）と詠んでおり、どうやら
同橋を「いく世」も経た「苔むすばかり」の橋と捉えていたようである。これを踏まえ右歌を粗々解釈すれば、
逢坂を忘れられませんが、年を経ましたが勢多の長橋の板朽ちるまで（逢瀬を忘れられませんが年老いしましたが）代々
経て苔むす）勢多の長橋の橋板が朽ちるまで）、となる。下句は、自分自身の老い先を同橋に仮託したとも、あ
るいは橋板が朽ちるのであるう遠い将来を指すとも、どちらとも解釈できる。

この匡房歌について恋歌中で「せたのながはし」を詠むのが、次の忠盛歌である。

四条の宮のうちに侍ける女のもとへつかはしける

一二八、あふさかのせきこゆばかりゆかずともふみだにみばやせたのながはし（忠盛集）

返事

一二九、あふさかのせきこゆばかりおもはずはせたのながはしなにかふみけん（忠盛集）

これらは異本系『忠盛集』B歌群所収歌で、「四条の宮のうち」の女性は人物名など不明である。忠盛が、たと
え逢瀬は適わなくてもせめて文だけでも見たいものです、と詠み贈ったのに対し、女は、逢瀬を思わないと言
うのでしたら何で文を寄越したのですか、と返している。近江の逢坂の関と、同じく近在する「せたのながはし」
とを組み合わせた機知に富んだ贈答歌であり、忠盛は前掲の匡房歌を踏まえたと推測されるが、匡房のように苔
むした同橋を直接に詠じているわけではなく、恋歌の言葉遊びとして詠み込んだとみられる。この点が匡房と忠

盛の「せたのながはし」詠出の際の相違と言えよう。

その忠盛歌に続き恋の贈答歌で同橋を歌材に用いたのが、当面の経盛歌となる。経盛も「あふ」「ふみ（文・踏）」との縁語関係で「せたのながはし」を用いており、歌の内容から、苔むして橋板が壊れそうな「せたのながはし」を詠じているとは取りがたく、忠盛歌のように言葉遊び的な使用が考えられる。経盛は匡房歌を参照していたではあるが、それに比して忠盛歌の方を参照した可能性が強く窺えそうである。この経盛歌も、前例の少ない歌枕を忠盛歌に倣って自歌に詠み込んだ一例と見て良からう。

《三》

前節では「きよみがた」「ひらの」「せたのながはし」という歌枕を詠み込んだ経盛歌三首を取り上げた。いずれも平安末期から多く詠まれた歌枕であり、それを詠じた忠盛歌を経盛が詠作時に参照したとみられ、経盛歌と忠盛歌との関連性が指摘できそうな例である。

他にも経盛歌と忠盛歌との関連性が若干窺えそうな歌がある。歌枕を詠み込んだ歌ではなく、同一場所の月を詠んだもので、次の経盛歌と忠度歌がそれである。

遍昭寺歌合

五六、月かけはむかしのそらにかはらじとおもひなすにぞいとどさやけき（経盛集）

右に『経盛集』五六番の遍昭寺歌合の歌を掲げた。同歌合は証本が現存しないが、『季経集』に恋一首、『経盛集』『林葉集』に月恋各々一首ずつの出詠歌が残り、俊患没年の治承二年八月以前が成立下限とされる（平安朝歌合大成）。また左の『忠度集』四七番も、詞書中の会記より当該歌との先覚の指摘がある。

遍昭寺にて、人人月見侍りしに

四七、あれにけるやどとて月はかはらねどむかしのかけは猶ぞゆかしき（忠度集）

経盛達が集った遍昭寺は永祚元年899年寛朝上人が建立した仁和寺末寺であり、平安時代中頃、範永達と同寺に

赴いた定頼が「ところのさまげにいとみじ西なる僧ばうの人もすまずあれたるに」(明王院旧藏本定頼集・二九番詞書)と描写するように、経盛参詠以前、既に荒廢していたものとみられる。忠度歌の「あれにけるやど」はそうした同寺を指した表現であろう。経盛歌には同様の表現は見当たらないが、初句「月かげは」の係助詞「は」は、上接語を取り立てて明示強調するが、それは逆に昔に「かはらじとおもひな」せない他の存在を言外に暗示することにもなるから、経盛もやはり荒れ果てた遍照寺を念頭に詠作したとも解せそうである。経盛と忠度は遍照寺に集い、その「むかし」の月を懐つて、「いととさやけき」(経盛)「なほぞゆかしき」(忠度)と詠じたものであろう。

遍照寺の月は平安後期より多く詠まれ、現存諸歌集中では経盛忠度両歌の他にも『後拾遺集』二五八番の範永歌、『故侍中左金吾家集』三七番歌、『散木奇歌集』四八五番歌や『林葉集』四九二番歌などがある。その中で当面歌二首と歌の発想や表現が類似する歌としては、次の忠盛歌があげられる。

あれたるやどの暁月

一二二、すみきけんむかしの人はかけたえてやどもるものはありあけの月(忠盛集)

『忠盛集』異本系B歌群の一二二番歌を掲げた。これは同系統C歌群の一六八番と流布本系B歌群の三五番に重出し、『新古今和歌集』一五五二番にも入集するが、右の一二二番及び『新古今集』甘露寺親長本など二部伝本所収歌を除き、初句「すだきけん」と異文である。いずれも文法的意味的に矛盾はないため、ここでは一二二番歌本文右に「だい」と私に書き添えた。また詞書にも相違が見られ、右歌は歌題のみ記すが、新古今集入集歌や「見勅撰」歌を採る流布本系三五番はともに「遍照寺にて月を見て」と記す。異本系一六八番は「遍照寺にて」と記すが、直前歌の「あれたるまのきのむし」題とも異なるので、多分「月」か「あれたるやどの暁月」との歌題の記述を欠いたものであろう。逆にこのC歌群の一六八番詞書を参照すると、右のB歌群一二二番歌も遍照寺での詠歌ということになる。右の各歌群所収歌の詞書の相違はいずれが本来的とも決着を付けがたく、取り敢えずここでは忠盛が遍照寺で「月」もしくは「あれたるやどの暁月」題を詠んだ歌と解しておく。

忠盛は、「もる」の語に「守る」と「漏る」を掛け、昔の人々が居なくなつた遍照寺を守る（に漏れてくる）有明の月、と詠む。初句は「澄み（住み）来けん」「集きけん」、どちらでも歌意は通じる。忠盛の依拠歌としては『後拾遺集』二五三番に載る惠慶法師の歌が諸先覚により指摘されている。

河原院にてよみはべりける

○すだきけんむかしの人もなきやどにただかげするは秋の夜の月（後拾遺集・二五三）

融や業平達が集つた往時の河原院を偲ぶ惠慶歌であり、忠盛は、惠慶歌の河原院を遍照寺に置き換え、「あれたるやど」と「ありあけの月」とを対比させ、その荒廢に対する寂寥感を叙している。初句二句の遍照寺に「すみきけんむかしの人」は月をながめていた人でもあつたらうから、忠盛は同寺に集つた（もしくは「住んでいた」）古人を偲び、彼等が眺めていた往時の月を、それと変わらぬ詠作時の有明の月より憶つて詠んだとも取れる。歌の表現や発想の面で、僅かながらも経盛忠度両歌と関連性が窺えるわけである。

因みに遍照寺や広沢の月を詠む歌は現存諸歌集中に散見するが、右の平家歌人詠のように「むかし」（あるいは「いにしへ」）などの語彙を用い、昔日の同寺やそれを照らす月を偲んで詠む歌は経盛以前には少ない。例えば先の定頼と同道した資業の歌「山の端に入りにし月はそれながらながめし人ぞむかしなりける（明王院旧蔵本定頼集・三〇）」のほか、『風葉和歌集』一二七三番所載の「野じまの三位中将」歌もあげられるが、後者はその所収物語や成立年代は分からないため平家歌人の詠歌との先後関係は明らかにしがたく、ここでは触れるに留める。

経盛や忠度はその詠作時、これら資業歌を始め遍照寺や広沢の月を詠じた先人の歌を参照していた可能性はあるだろう。だが、忠盛歌を参照していたか否かは、その各々の詠作時期が不明なため、早々には決着が付けられそうもない。『忠盛集』異本系C歌群の一六八番詞書「遍照寺にて」や、『新古今集』入集歌詞書「遍照寺にて月を見て」が経盛らの参じた遍照寺歌合を指すかは、現存資料から判断する術はない。遍照寺歌合は『林葉集』成立の治承二二（一〇九〇）年八月以前が成立下限とされるが（前掲、平安朝歌合大成）、その催行時期は分からず、仮に忠

盛が経盛達と遍照寺歌合に同座していたとすると、ともに「むかし」の遍照寺やその月を詠む点で、平家歌人同士相互に影響しあつた可能性が出てくる。逆に忠盛没後のそれとすると、経盛や忠度は忠盛歌を参考歌の一首に用いて詠作した可能性が考えられよう。先に、経盛歌と忠度歌は忠盛歌との関連性が若干窺えそうな歌、と記したのは、こうした理由に因るのである。

《四》

これまで、経盛の歌枕を詠み込んだ歌三首、並びに遍照寺歌合に出詠した経盛歌・忠度歌各一首を、忠盛歌との関連で取り上げた。既に平家歌人の歌枕（地名）多用については指摘があるが、ここでは忠盛歌と経盛歌に共通する前例希な歌枕に着目し、それを忠盛と経盛がどのように用いているか、との観点から粗々吟味した。結果として「きよみがた」の波路を照らす月を詠じた「経盛集」五五番歌、「せたのながはし」を恋の贈答歌で用いた九三番歌、「ひらの」に平家を掛けた二一六番歌において、経盛が忠盛歌を介して歌枕を摂取したとみられる事を明らかにした。殊に忠盛は各々先人の歌を踏まえつつ、発想を転じて新たな角度から（平野・清見潟）、あるいは恋の贈答歌の歌材として（勢多の長橋）、各々工夫を凝らして歌枕を詠んでおり、経盛は単なるその摂取に留まらず、忠盛歌のそれらの着想を活かしつつ自歌に取り込んでいる。平家歌人の詠み込んだ歌枕が多い中にも、このように忠盛から経盛へ受け継がれたものが見られるわけである。もちろん「経盛集」には、他にも忠盛歌と同一の歌枕（地名）を用いた歌はあるが、前稿²で取り上げたものを除き、それらは同時代歌人にも見られる場合が殆どで、忠盛歌との関係を裏付ける資料には用いがない。先に忠盛歌以前の用例希な歌枕とした所以である。また遍照寺歌合出詠歌の経盛歌・忠度歌各一首については、忠盛歌の詠作時期が不明なためその関連性を明らかにすることは難しいが、ともに遍照寺の昔やその月を詠じている点が指摘できる。このように「経盛集」には、僅かだが忠盛歌と関連のありそうな歌が見られるのである。

冒頭に記した如く、稿者は先に、現存諸歌集中で忠盛初見の和歌表現が経盛・忠度・経正の各家集所収歌中に

見出だせる、との報告を行った。²⁾『経盛集』に関してその要点のみを記すと、六四番歌の「しほぢもしらず」との表現が異本系『忠盛集』二四番歌より撰取したとみられること、以下同じく同四番歌の「みづわけやま」は同『忠盛集』一番歌、同五一番歌の「まくらにしかのこゑをきく」は同『忠盛集』四二番歌、同七三番歌の「あはじしませとのしほかぜ」は同『忠盛集』十五番歌（一七六番歌にも重出）、を各々踏まえたとみられる。これに先に吟味した経盛の歌枕を詠み込んだ歌三首、さらに遍照寺歌合での詠歌一首も加えると、『経盛集』所収歌中の八首（贈答歌の相手を除く）が忠盛歌と何らかの関連性が窺える歌ということになる。

経盛が依拠した忠盛歌を『忠盛集』中の歌群に即して整理したのが、次の表である。

〈表〉経盛が依拠した忠盛歌の歌群別一覽表

家集名	歌番号	異本系 A	同 B	同 C	同 D	流布系 A	同 B
経盛集	四	一					
〃	五一	四二					
〃	五五	三七					
〃	五六			一一一			
〃	六四	二四		一六八			
〃	七三	十五			一七六		
〃	九三		一二八				
〃	一二六	八二					
							三五

一見して明らかな通り、経盛が参照したと推測される忠盛歌は異本系 A 歌群すなわち「忠盛百首」歌が多く、全八首中の六首を占める。おそらく経盛は「忠盛百首」を所持し、それを詠作時に参照していたと思われる。遍

照寺歌合に出した『経盛集』五六番歌については、『忠盛集』異本系B歌群一二一番（同C歌群一六八番・流布本系B歌群三五番に重出）の忠盛歌との関連性を先に触れたが、いずれの歌群所収歌と関係するかは分からず、ひとまずここでは措く。このほか「せたのながはし」を詠み込んだ『経盛集』九三番歌は、異本系一二八番歌を踏まえたとみられるが、この歌は同B歌群にのみ採られている。裏返せば、経盛が同B歌群の歌を参照していたか、あるいは同忠盛歌を記した別の資料を参照した、と推測される。当該の忠盛歌は『忠盛集』以外の他歌集に採られていないから、別資料と言つても「故刑部卿のよまれたる歌ども」（『経盛集』一〇九番詞書）として経盛の手許にあった忠盛の歌稿類が想定される程度だが、経盛がいずれの資料に依つて詠作したかは検討材料に乏しく、決着を付けがたい。

だが逆に、『経盛集』にこれら忠盛歌と関連性の窺える歌が採られている、との点に留意したい。経盛は、同B歌群一二八番もしくは別資料所収歌に依つたと推測される歌（九三番）のほか、異本系A歌群「忠盛百首」所収歌に依つたとみられる歌六首も、「不用固舞仍惣注出」（同集奥書）と記す如く、家集編集時に撰歌配列している。七首という数は少ないかもしれないが、少なくとも忠盛歌に関わる詠歌を家集に取り込んでいるのである。という事は、右の歌枕や和歌表現の撰取から窺える以外にも、経盛は忠盛歌と関係のありそうな歌を家集に取り込んでいる可能性がある。

実は、『経盛集』中には、歌の内容は異なるが忠盛歌と似通つた状況下で詠まれた歌が二首見られる。それら忠盛歌は異本系B歌群にのみ入る歌である。左にそれら忠盛歌と経盛歌を掲げてみる。

はるごろ、あかしよりのほらせ給けるに、為通卿つのくにのしほゆあむとてありと、
 きかせたまひてつかはしける

一〇四、ながるすな宮このはなもさきぬらんわれもなにゆへいそぐつなでぞ（忠盛集）

やよひのかみの十日ごろに、熊野より下向し侍りて、別当のもとへつかはしける

二一、みくまのみやまのさくらちりにしをはなの宮このはなはさきぬや（経盛集）

かへし

別当実家卿

二二、はるくれてやまちのはなのちるをみばみやこのはるはすぎぬとをしれ（経盛集）

まつりの使し侍りけるに、かんだちにものみけるくるまの物見より、

むかし見し人の侍りければ、まうしをくりける

一三六、わかれにし人にもけふはあふひぐさかみのちかひぞうれしかりける（忠盛集）

ひさしくおとせぬ女のもとより、賀茂のまつりの日、あふひに付けて遣し侍りける

九四、わすれにしその神やまのあふひ草今日だにかけておもひいでずや（経盛集）

かへし

九五、けふのみやおもひいづらむあふひ草我はころにかけぬ日ぞなき（経盛集）

異本系『忠盛集』一〇四番歌は流布本系『忠盛集』六番のほか『詞花集』二七五番にも入集する。第五句は『詞花集』入集歌では同「いそぐふなでぞ」とあり、何らかの事情で異文を生じたものであろう。歌は忠盛が摂津で潮湯浴み中の為通に対し、「宮このはな」を見るべく我も「いそぐつなでぞ」と詠み贈ったものである。旅先で都の花を気に掛けて詠む歌は諸歌集に散見するが、『経盛集』一一・一二番所収の、経盛が実家に「宮このはなはさきぬや」と尋ねた歌もその一例に教えられる。明石より帰京途中の忠盛と、熊野下向時の経盛とでは所在地は異なるが、旅中との状況下で都の花を憶う歌を詠む点は同じと言える。

次の異本系『忠盛集』一三六番歌は、賀茂祭の使をしていた忠盛が「むかし見し人」に会って贈った歌と詞書に記す。『経盛集』にも、賀茂祭の際「ひさしくおとせぬ女」と経盛が葵に掛けて交わした贈答歌（九四・九五番）が見出だせる。忠盛と経盛の参じた賀茂祭が同一時か否かは分からないが、忠盛歌・経盛歌ともに疎遠となつた女性と会つた際の詠歌であり、これも作歌状況を同じくする歌と言える。

このように『経盛集』所載歌と異本系『忠盛集』B歌群所収歌との間には、似通つた詠作状況で詠まれた二首

が指摘できる。もちろん他歌人にも同内容の詠歌はあるから、経盛の依拠歌として忠盛歌を掲げたわけではない。興味深いのは、『経盛集』恋部末の九二・九五の贈答歌二組において、その各々の経盛歌は、同B歌群所収歌の「勢多の長橋」を踏まえたと推測される歌（九三番）と、右の忠盛歌と詠作状況を同じくする歌（九四番）、となることである。なお経盛歌に対応する忠盛歌二首は、異本系B歌群中で連続する二首ではないが、恋に関わる歌を並べた同歌群一二八・一三九番に収められている。

これに前掲の「はなのみやこ」を詠じた贈答歌一首を加えると、異本系『忠盛集』B歌群中の三首（贈答歌の他者詠を除く）に、『経盛集』所収歌と詠作事情の類似や表現摂取が指摘できることになる。先に経盛の遍照寺歌合出詠歌に関わって当該忠盛歌をひとまず措くとしたが、この歌も同C歌群一六八番とともに同B歌群一二一番にも入るから、これを加えれば、四首（除他者詠）が『経盛集』との関連性の窺える歌となる。

即ち『経盛集』と『忠盛集』、殊に異本系B歌群とは、詠作状況を同じくする歌（忠盛集一〇四・経盛集二一、以下同）（忠盛一二六・経盛九五）、「せたのながはし」を詠み込む贈答歌（忠盛一二八・経盛九三）、遍照寺に関わる詠歌（忠盛一二一・経盛集五六）、という具合に若干の類似点が指摘できるわけである。

同B歌群については、既に先覚が、忠盛へ敬語表現を用い、四季・恋・雑部に整理された歌群であり、その編者としては経盛あたりを有力候補、とされているが、先に粗々吟味した如く、経盛自撰家集の入集歌と異本系B歌群のそれとは、どうやら関連性が見受けられる。経盛が、忠盛歌に依ったと推測される一首のみならず、忠盛歌と詠作事情が似通った歌三首までも『経盛集』に入れているという事は、先に経盛の同A歌群「忠盛百首」所持を推測したが、経盛は同B歌群も所持しその家集編集に際して同B歌群も参考資料の一つとして用いていたとの可能性を考えさせる。さらに同B歌群が「故刑部卿のよまれたる歌ども」（前掲）より撰歌されたものとする、と、『経盛集』編集に見られる類似点から、先覚の指摘する通り、経盛が同B歌群の編者であった可能性も考えて良い事になるだろう。

忠度も同B歌群所収歌に倣って遍照寺歌合出詠歌（忠度集四七）を家集に取り込んだとすると、同歌群を家集

編集時に参照していた可能性はあるだろう。例えば次の忠盛歌と忠度歌の波線部は、

一四二、いづくとも月はわかじをふるさとはものさびしかるかげぞ、ひける（忠盛集・詞書「無常」）

四二、つきかげはいづことわかじものゆゑにやどに心のとまらざるらむ（忠度集・詞書「月」）

と、ともに月影が何処でも不変であると詠じており、これは『堀河百首』の隆源歌「いづくとも月はわかじをいかなればさやけかるらむさらしな山」（七九七・月）に依った表現とみられる。右の忠盛歌は同B歌群にのみ採られる歌であり、それと表現の似通った歌を忠度が家集に配しているのは、忠度も異本系B歌群を家集編集時に参照していた可能性を窺わせる。尤も、『忠度集』については他に例歌は乏しく、右の指摘に留まるが。

なお『経盛集』と他の異本系C歌群や流布本系A・B歌群との間には、忠盛歌と経盛歌との関連性を示唆するよな歌は余り見られない。例えば異本系C歌群一六八番歌を始め、そうした例は僅かに見出させるのだが、『経盛集』との関連を窺う材料に用いる程ではない。主に同B歌群を取り上げたのは、以上の理由による。

経盛は異本系『忠盛集』A・B歌群所収歌を踏まえて歌を詠んでおり、そればかりでなく、それら所収歌を自らの家集編集時に参照していた節が見受けられる。『経盛集』奥書に「先賢之製作」に交わりて「深慙」づ、との記述があるが、この「先賢」の特定は難しいものの、その一人に父忠盛が含まれる可能性は考えられそうである。

※勅撰集・私撰集・歌合所収歌の引用に際しては、「忠盛集」を除き、新編「国歌大観」による。

〔注〕

- (1) 参考までに「経盛集」の奥書を左に掲げる。
神主重保依願請当世好土各和歌百首可進納神殿云々、不用固舞仍惣注出、詠春花以於斯香色其調惟凡也、翫秋月以難述光輝其体之疎也、更交先賢之製作深慙、功拙之相異、然而忝仰柏城之如在忽染松筆而記之、寿永元年六月十日
- (2) 桑原博史氏編『日本古典文学の諸相』（勉誠社、平成九年一月）所収、拙稿「平家歌人における忠盛歌表現の受容」
- (3) 異本系「忠盛集」を四歌群、流布本系のそれを二歌群に分類するに際しては、左の先覚のご研究に依った。
井上宗雄氏著『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、昭和五十三年十月）
- (4) 谷山茂氏・黒川昌亨氏「私家集大成」中古Ⅱ所収「忠盛集」解題。
犬井善壽氏「平忠盛集」本文考（『文藝言語研究』文藝篇 第4巻・一九八〇年三月）
- (5) 谷山茂氏蔵本は「私家集大成」中古Ⅱ所収「忠盛集」Ⅱにより、引用に際しては私に濁点を振った。
神宮文庫本は「私家集大成」中古Ⅱ所収「忠盛集」Ⅰによる。
- (6) 「群書類従」第五輯所収
- (7) 萩谷朴氏編『平安朝歌合大成』第八卷（同朋舎刊、一九七九年八月）による。
- (8) 犬井善壽氏「忠度百首」小考——「堀河百首」との関連において——（『国語国文』第四八巻五号・昭和五四年五月）四四頁。
- (9) 谷山茂氏著「谷山茂著作集」第六卷（角川書店、昭和五九）所収「平家の歌人」参照。
- (10) 注3の谷山茂氏・黒川昌亨氏「私家集大成」中古Ⅱ所収「忠盛集」の解題参照。